

# आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館  
京都文教短期大学図書館 / 京都府宇治市横島町千足80

## 図書館へのいざない

京都文教大学図書館長

総合社会学部・教授 (国際協力・CSR) 島本 晴一郎

新入生のみなさん、新年度を迎えられた在学生の皆さん。新たな気持ちでスタートされたことでしょ。春になれば、自然界の万物が今まで蓄えていた精気を見事に開花させるように、私たち人間もこれまでの眠りから覚めて、知的開花を行います。図書館はそのための環境を整えています。

皆さんはこれまで図書館をどのように利用されてきましたか？学校の図書館、町の図書館、人によってさまざまでしょう。わくわくして冒険小説を読むために入り浸ったあの日、宿題をするために参考図書を探ったあの日、ひそかに好きな誰かがいるので通い続けたあの日、家では集中できないので図書館で受験勉強をしたあの日、DVDを借り出して館内のビデオの前で映画鑑賞をして過ごしたあの日などなど、理由はさまざまでしょう。でも、意外に図書館の職員さんのお世話になることが少なかった人も多いのではないかと思います。

実は図書館の命は、体系化された知識・情報の収集・貯蔵・整理分類・公開と、思索できる静かな空間提供のほかにもうひとつあります。それは、利用者の知的欲求とその背景を把握し、その課題を解くための方向にいざなうことにあります。特に後者は図書館員の腕の見せ所なのです

が、これをレファレンス・サービスと呼びます。

先月まで奈良県の広陵町立図書館を舞台にした「天使のいる図書館」という映画が公開されていたのをご存知ですか？ご覧になった方もいるかもしれません。この映画では小芝風花が演ずる新米図書館職員さくらが、レファレンス・コーナーを担当しています。彼女は利用者の質問に答えるのですが、まるでパソコンのように機械的に図書、資料のありかを教えるだけです。人との付き合いが不得手なのです。「これはレファレンスではないわよ」と先輩司書にたしなめられながらも、なかなかその意味がつかめない。そんな彼女がやがて、図書館に来て本を探すのでもなく、ただ椅子に腰をかけて手持ち無沙汰な一人の老婦人に会います。この老婦人が差し出した一枚の古い写真をてがかりに、彼女の探し求めているものが何なのか、さくらは一緒にそれを捜し求めることを決意します。このときから、さくらの中で化学反応が起き、レファレンス・サービスの進化が始まるのです。

この映画では老婦人の捜し求めているものは、病に冒され余命いくばくもない自分が、むかしこの地で出会った恋人との記憶でした。その断片的な記憶を集約して、写真や記録などを辿ると、そ

これは図書館の嘱託であった田中につながる事が判ったさくらは、この二人が再会する場を作ることに奔走します。これがいわば「天使」という題名のモチーフになっています。映画ですからいささかドラマチックにできていますが、私が強調したいのは、この映画のストーリーよりもむしろレファレンス・サービスの意味が象徴的に伝えられている点です。

つまり、図書館のレファレンス・サービスとは、ただ単に特定の資料や図書がどこにあるのかを教えてくれるだけではないということです。利用者が知りたいのはどういうことなのか、その背景や課題をつかみ、そのための資料や情報にどのようなものがあり、その課題を解決するためのアプローチを教えてくれることです。課題解決へのいざな

い、これは電子端末による情報検索ではできないことですね。

わが京都文教大学・短期大学の図書館も、このレファレンス・サービスの充実に大変力を注いでいます。一度ぜひ図書館に来てみてください。静かでピンとはった心地よい緊張感の中に、身をおいてみてください。そしてカウンター越しに、何でも気軽に相談をして見ましょう。皆さんの興味のあること、整理できていなかったことなどへのうずうずした疑問にもやさしく答え、あらたな知的開花に誘ってくれる館員のみなさんがそこにいます。春のこの開花の季節に、あらためて自分の知的欲求を開花させませんか？

(しまもと せいいちろう)

## \*\*\* Chadō - wa, kei, sei, jaku \*\*\* 茶道—和 敬 清 寂

ライフデザイン学科・准教授 (仏教学、英語教育学、国際交流) プッセル 良風

*Chanoyu to wa* Chanoyu  
*kokoro ni tsutae* is conveyed through the mind,  
*me ni tsutae* thorough eye  
*mimi ni tsutae* and ear -  
*hitofude mo nashi* without a single stroke of brush.  
(Grand Master Sen Sōtan (1578-1658), in Hirota, 1995: 95f.)

The world is in a turmoil now. More important than ever is to become quiet - in the heart and mind. This article outlines how the Japanese Way of Tea can help in this. Dr. Sen Genshitsu, the 15th Grand Master of the Urasenke Way of Tea, says: "Peace through a bowl of tea".

The Way of Tea has four philosophical aspects known as *wa* (harmony), *kei* (respect), *sei* (purity),

*jaku* (tranquility).

*Wa* (harmony) means the oneness of nature and people, of host and guest, and right choice of utensils for a particular tea gathering. For example, light equipment that evokes the feeling of coolness in summer, or heavy utensils that give the feeling of warmth in winter. It teaches that man is not separable from nature, and nature not from man.

*Kei* (respect) means a feeling of gratitude, goodwill, respect for the worthiness of other people, acceptance of their individuality, and also respect for both cheap as well as expensive utensils. In the way of tea, *kei* is manifested in hospitality and mutual concern for well-being of the host and guests, as well as the careful handling of the tea utensils and equipment. It teaches that

happiness cannot be attained by outward means, but can only come from inside by a reformation of the mind; it manifests itself outwardly in ethical actions, such as respect for other people and quiet handling of the tea utensils and equipment.

*Sei* (purity) includes cleanliness and orderliness, both physical and spiritual. In the Way of Tea, guests first wash their hands and rinse their mouth before entering the tea hut, which symbolises their cleaning of the heart and mind as well as of the body; the host, when carefully wiping the tea utensils with a silk cloth, also purifies his heart at the same time, and after the tea gathering, having set in reflective silence for a while, they will put the utensils back to their original places. This teaches that a clean heart leads to a clean life.

*Jaku* (tranquility) means oneness, stillness, happiness and complete peacefulness. It is achieved when *wa*, *kei*, and *sei* are constantly practiced.

As we can see, the Way of Tea sees the development of harmony and world peace as, first of all, being established and developed within oneself through continuous devoted practice. From there, it can spread over to fellow beings and all over the world, ideally. Buddhist ideals that are labeled in the Way of Tea as *wa*, *kei*, *sei* and *jaku* result in a simple mind that doesn't regard incapacity as lacking something, but that transcends material things and worldly values, and that has therefore realized spiritual freedom: a mind that is not irritated when something unexpected happens, or when something is insufficient, and which prefers living quietly and happily with only what is really necessary - in Buddhist words, being freed from illusions. The Japanese Way of Tea develops the ideal of Service Above Self, benevolence, and feeling happy for the success of others, and engaging in voluntary

service, because it recognizes that these are the basic ingredients for world peace:

I see all the nature surrounding us in the green color of the tea bowl. Closing my eyes, I find green mountains and pure water within my own heart. Silently, drinking tea, I feel these become part of me. Sharing his bowl of tea with others, they, too, become one with it and nature. What is the wonderful bliss that people who follow the way of tea experience? That we find everlasting tranquility with ourselves and with others, and wonders, realized through the sharing of a ball of tea in the meeting of my-heart-and-your-heart.

(Sen, 1979: 98)

Hirota, Dennis, 1995, *Wind in the Pines. Classic Writings of the Way of Tea as a Buddhist Path*, Fremont: Asian Humanities Press.

Sen, Soshitsu XV, 1979, *Tea Life, Tea Mind*, New York and Kyoto: Weatherhill/Tankosha.

(ぶっせる りょうふう)

教育研究のグローバル化への対応が求められる昨今です。

プッセル先生より簡単な英文で寄稿いただきました。この機会に辞書を片手に英語に慣れ親しみましょう！



photograph: Ryofu Pussel

## ❖❖❖ 「物語」の効能 ❖❖❖

総合社会学部・准教授（社会学、メディア文化論） 山 崎 晶

健康維持のための栄養素にはならないが、「物語」は私にとって重要な養分といっても過言ではない。小説、音楽、コミック、芝居、映画、テレビ番組など、形態は問わない。また、書き手がプロでなくても構わない。誰かの体験や考えがうつられたものであれば、それらは私にとっての「物語」である。登場人物が実在であるかどうか、さほど重要なことではない。子供の頃は「物語」の内容や登場人物に浸りきってしまい、日常生活に差し障えることもしばしばだった。大人になった今、さすがにそうしたことはなくなったが、移動中などの「すき間時間」に別世界に旅立つことはちょっとした贅沢である。

「物語」が好きだということを実感したのは、小学校に上がる前後あたりだろう。鮮明に記憶しているのは、母に私と弟の枕元でモーツァルトがしたためた書簡集（『モーツァルトの手紙』）や、作曲家團伊玖磨のエッセイ（『パイプのけむり』）の読み聞かせをしてもらっていた夜のことである。当時彼女からピアノの手ほどきをもらっていたこともあって、モーツァルトや團が著名な作曲家であることは知っていた（團との出会いは、童謡「ぞうさん」である）。だが、子供でもわかる下ネタが毎回飛び出す書簡や、まだ珍しかった爬虫類・イグアナをペットにして来客から悲鳴をかつさうことを飄々と楽しんだり、色弱に対する社会の理解不足をユーモラスに訴えたりする作曲家たちの姿は、私には大変魅力的な「物語」だった。思い返すとずいぶん背伸びした「読み聞かせ」本の選択だと思う。とはいえ、これら

は絵本に少しも興味を示さない弟に向けた、音楽教育に携わっていた母なりの選択だった。やがて続きが気になって、昼間にこっそりと書棚から抜き取っては拾い読みし、そのうちに母の書棚から別の本を引き抜いたりするうちに、私は「物語」の楽しさにはまりこんだ。以来小説が演劇になるなど形を変えながら、私の側にはたいてい「物語」がある。

「物語」の最大の魅力は、自分とは異なった人生を疑似体験できることにあるだろう。一度きりの人生では、経験できる物事の幅は限られている。だが、「物語」を通して私たちは、現実では起こりえないような物事さえも体験することができる。加えて、「物語」から得られた体験は、時に私たちが見慣れた事物の隠れた魅力に気づかせてくれたり、実生活に役立つヒントをハウツー本よりも効果的に与えてくれたりもする。今日、手のひらサイズの端末を通してweb上で友人と他愛もないやり取りをしたり、指先で直感的に操作してゲームをプレイしたりすることが、慌ただしい日常の彩に欠かせないものになりつつある。それらは確かに楽しいし、息抜きにもなる。しかしそれと同時に、「物語」と一人で向き合うことも私たちには大切ではないだろうか。そんなことを考えながら、今日も通勤かばんの中に本が入っていることを確認する。

（やまさき あき）

## 🍓🍓🍓 私のすすめる3冊(私の推薦図書) 🍓🍓🍓

食物栄養学科・准教授(給食経営管理、抗加齢医学、スポーツ栄養学) 小 椋 真理

### ◎ 『バムとケロのにちようび』

島田 ゆか 作絵／文溪堂. 1994

バムとケロがくり広げる“雨降りの退屈な日曜日”の過ごし方を題材にした絵本です。しっかりもののバムと不気味可愛いケロちゃんのやり取りが何とも微笑ましい。ケロちゃんのいたずらっぷりは子供の笑いのツボにはまるようで、子供に読み聞かせをする度に決まって笑い転げていました。島田ゆかさんの描く絵はかわいらしいだけではなく、よく見ると主人公以外の登場人物の様子が細部まで描かれ、読む人の観察力や妄想次第で次のストーリーが始まります。子供の絵本ですが、読むほどに様々な発見のある絵本です。

### ◎ 『面倒だから、しよう』

渡辺 和子 著／幻冬舎. 2013

昨年末亡くなった渡辺和子さんのエッセイ。冒頭で「お金で買えないものの一つに心の美しさがある」と書かれていました。昔担当していた変な言い方だがとても素敵な患者様から同じ言葉を聞いたことを思い出しました。著者の言葉で「自分の怠け心と闘ったときに、初めて本当の美しさ、自分らしさが生まれてくるのだと思う」の言葉に、つい面倒だからとやらないことが多いのではないかと考えさせられました。「面倒でもやってみる」ことが自身を輝かせることができる。そんなヒントとなる話が詰まった一冊です。

### ◎ 『「抗糖化」で何歳からでも美肌は甦る』

米井 嘉一 著／メディアファクトリー. 2012

「糖化」という言葉を聞かれた事があるでしょうか？最近抗糖化の化粧品もみられるようになりました。糖化は人体における老化現象で、そのメカニズムはとても複雑で難しいのですが、「糖化」について分かりやすく解説されており、糖化によって生成されるAGEs(蛋白糖化反応最終生成物)を増やさない日常生活の6つのルールを取り上げています。食材や食事の取り方、睡眠、ストレスマネジメント、どこでもできるエクササイズなど役立つ情報が入った一冊です。ぜひ抗糖化の一助になればと思います。

(おぐら まり)

## ❖❖❖❖❖❖❖❖ 「君の臍臓をたべたい」を読んで ❖❖❖❖❖❖❖❖

ライフデザイン学科2回生 徳留泉輝

思春期には、周りに合わせることを覚える。合わせなければいけないと、感じてしまう。それなのに、私は周りとは違っている。同じじゃない。そういった特別感も欲しがってしまう。みんなと同じものが欲しい。みんなと違うものも欲しい。これが、みんなの知らない私が欲しい。そんな感情に繋がると私は考える。これは思春期に形成された後、薄れてはいくが、消えることはなくその人の中に残っていく。だからこそ人は、「秘密」という言葉の特別感に酔いしれ、自分と相手だけの甘美な関係を求めてしまう。

この本は、治療法が見つかっておらず完治することのない病に冒されていく女子高校生と、人と関わることにに対して消極的な男子高校生の二人が、彼女が死ぬことがわかってから感じたことを記していた「共病文庫」をきっかけに関係性を築いていく。そしてその二人の関係は、二人にしかわからないままで始まり、終わっていく。それはとても不確定でともすればすぐにでもなくなってしまわないかというくらい、儂く脆い状態のままで続いていく。そのことが前述した特別感や失くしてしまう怖さを生み、二人の関係をさらに深めていく大きな要因になり得ている。

『君の臍臓をたべたい』。このタイトルを初めて見た時、ほとんどの人はホラー小説であったり、猟奇的な話を想像したのではないだろうか。しかしこのタイトルも、二人にしかわからない関係を築いていることを暗に示している。その二人にしかわからないという淡さに人は美しさを感じずにはいられないのだと、私は考える。

そしてもう一つ、思春期を迎えると人は周りから見られるということを感じる。周りの人を見て、自分の立ち位置を考える。それを個性だと社会は言い、人はそれぞれ作り上げた役割をこなしている。そしてその役割というのは、大人になればなるほど確立していく。つまり、年をとるほど自分の個性・立ち位置を変えようとしなくなっていくということだ。そのなかで、一番自分の個性や立

ち位置が不確定で変わっていく時期が思春期である。変わっていくということは言葉を変えれば、自分を変えようと常に努力をしているということだ。主人公の二人も、自分を曝け出しながら二人で時間を過ごすなかで、少しずつ自分の役割というものを換え、新しい自分を作っている。この時期を過ごし、日頃から自分の役割をこなしている人からすると、自分のなかで役割が定まっていなかった時期を恥ずかしく思う人が多い。相手に知られていない一面を見せるのは不安や恐怖が伴う。完成していなかった自分を受け入れられない人が圧倒的に多いのだ。また、主人公の二人のように自分を見つめもがくことをせず、流れのままに役割を選んだ人には、この二人の葛藤が遠いものに見えてしまう。そういった人にはこの作品に感情を乗せることは困難であろう。

逆に、同じ状況に陥り同じ経験をし、自分を受け入れ認められた人には、この作品にふれることは、弱い自分を回顧しそのときに感じていた痛みを再び思い起こすことになってしまう。しかしそれは、そのときにしか感じられなかった苦悩や幸せを含めた感情をもう一度感じられるということであり、それによって、物語の外にある自分の物語をも感じながら読み進めることができる。そのことが「共感」を生み、一つの作り話としてだけではなく読めるこの本の魅力に繋がっているように思う。

最後に、この本は意外な結末で締めくくられている。ここでの意外というのは、想像が「できない」結末ではない。誰もが当たり前のこととして捉え、想像を「しない」結末である。誰にでも起こりうる結末を選ぶことで、著者は読者になにを訴えたのか。言葉の外で、なにを伝えたかったのか。著者が綴った言葉から、自身の人生を通して違ったものを感じてほしいと願う。

『君の臍臓をたべたい』住野よる著／双葉社.2015  
(とくどめ みずき)